

# 第1話

## あなたは諦観者、 それとも詰問者？

### ●プロローグ

仕事に出かける途中の電車の中で、静子（詰問者）と明美（諦観者）の二人はこんな会話を始めました。静子と明美は同じ会社に勤めています。とはいっても静子は正社員で、明美は学生アルバイトです。

明美「私、明日、学校休もうかなあ。授業に出ると、アルバイト遅れちゃうんだあ。遅れると文句言われんのよ。嫌になっちゃうわよ。学生だって分かってて雇ったくせに、今更、仕事に遅れるな、も、ないよねえ」

静子「あなたはアルバイトだからいいじゃない。仕事してたら、しょっちゅうよ」

明美「嫌だなあ、大学卒業したら、仕事しなくちゃなんないんだよねえ」

静子「ほんと、大変だよお。学校だったら寝られるからいいけどさあ、仕事はそういう訳にはいかないでしょ」

明美「そうだよねえ。今は、アルバイトだからいいけど、仕事になったら、嫌になったからすぐに辞めるってこと、できないもんねえ。好きでなくちゃ、やってられないよね」

静子「そうでもないよ。私、今のところ、そんなに好きじゃないよ。上司も、ブツブツう

るさくてさあ。でも、再就職するのって難しいじゃない。だから、我慢するしかないのよ。私、仕方なくやってんのよ」

明美「ああ、嫌だなあ。つまんないよ、そんなの。私さあ、何がいちばん嫌かって言うとね、上の人にきつく言われると辞めたくなくなっちゃうんだ。あーあ、何のためにやってんだか。お金は欲しいけど」

静子「ほんと、全然、つまんないよ。でもさあ、生きていかなくちゃなんないからねえ」

明美「……、何で生きてるんだろうねえ」

その呟きは、「何のために生きているのだろうか」といった“生”の意味を問うというよりも、

「生きたくもないのにどうして生きなきゃならないんだろうね」といったニュアンスの響きを含んでいました。

これが、20代前半の女性の会話です。

どちらも申し合わせたように高めのヒールのブーツ。アルバイトの明美は指と足にネイルアートを施していて、二人とも、頭のとっぺんから足のつま先まで最先端の流行で決めているほどにファッショナブルな現代っ子なのです。

そんな二人がおよそこんな会話をしているなどと、誰が信じられるでしょうか。

明美の呟きがあまりにも衝撃的だったのか、しばらく二人の間に沈黙が続いた後、静子が下車するために席を立ちました。

その彼女の後ろを追いかけるようにして明美が、  
「お店の人には、明日は行きますって、伝えておいてね」

と念を押しました。静子はその声を背中で受け止め、「分かった」と片手を挙げて応えて小走りに降りていったのでした。

### ★ちょっと考えてみましょう

アルバイトの明美は、「きついこと言われると、辞めたくなくなってしまふ」。それは何もアルバイトの話だけではありません。親子の関係でも大学の友人関係でも、「相手がきついことを言って自分を責めてくる」と感じるや、仏頂面になって反発し、押し黙ってしまいます。

そんな態度をとっては嫌気がさしてアルバイト先を辞めてしまうので、これまであまり長続きすることがありませんでした。

そのために明美は、卒業したら、正社員として就職するより、「派遣社員としてやっていったほうが、責任を負わなくてすむから気が楽だ」と漠然と考えていました。

しかし明美が認識しているように、ほんとうに明美が出くわす相手がたまた

ま、いつも「きつい」相手だったのでしょうか。

その可能性を考えてみると、

- 1 ほんとうにアルバイト先の社員の彼女に対する扱いが「きつい」。
- 2 明美がアルバイト先の社員の注意の仕方を「きつい」と感じてしまうだけで、ほんとうに相手の注意の仕方が「きついわけではない」。
- 3 社員の注意の仕方も「きつい」ので、明美自身の受け答えの態度もつい「きつくなってしまう」。
- 4 社員の注意の仕方は初めは「きつくない」が、明美の受け答えが無愛想なので、つい社員の注意も「きつくなってしまう」。

### ●親子関係で築かれた恐怖心

明美がアルバイトしているのは装飾デザインの「製造と販売店」です。その店でこういうことがありました。

あるとき客がやって来て、

「もう一カ月も注文した品物が来ないんですけど、どうなっているか調べてくれませんか」「ちょっと待ってください」

そう応えながら、明美はこのとき「調べてくれませんか」という言葉に反応して、「客に責められている」と感じて萎縮しました。

客は決して明美を責めた言い方をしたわけではありませんが、明美は相手が少しでも自分に質問をしたり注意をしたりすると、「責められている」と受け取ってしまうのです。つまり「あんたが悪いでしょ」と言われているように感じてしまっ、反発する気持ちが起こったのでした。

もちろんこれは、明美が親子関係で、母親に詰問的に責められてきた明美の自然な反応です。

明美は責められていると感じたとき、無意識に身体が反応して萎縮してしまいます。

これは彼女が、親子関係で、母親に絶えず責められていたからでした。だから彼女にとっては、客の言葉であっても、それが単なる質問であっても、明美にとってはすべて「責められている」と感じてしまうのでした。

しかし明美の萎縮した態度は、客には「ふて腐れている」という印象を与えました。明美は、小さいころ、親に対して萎縮していたり、黙って従いながらも、心の中では反発していました。それがそのまま、客との関係にも反映されています。

そのために、

「ええ、確かに届いています。でも、担当の者が電話したはずなんです」

と、自分をその「責め」から守ろうとして、これもまた、詰問者である母親から学んで

いるとおりに、相手を責めるような応え方をしてしまいました。

「いいえ、電話は聞いてませんけど・・・」

と自分の言葉に反論された明美は、さらに「攻撃されている」と感じて、

「そんなはずはないと思います」

挑戦的に打ち消しながら、

「お電話をしても、お客様がご不在の場合もあるんじゃないですか」

と、明美は、連絡をしていないということを認めようとしません。

さらに客は、

「でも、うちは、いないときは留守電にしていますから、電話をいただいたのなら、留守電に入っているはずなんですね」

謝るところか電話がないことを認めようとしないう明美に、客はいつそう苛立ちを感じました。それで明美はいつそう、自分を守ろうとして、攻撃的になりました。

「家族の方が取られたんじゃないですか」

明美は意識では自分を守ろうとしているのですが、実際の行動面では相手を攻撃してしまっています。ここに諦観者の意識のギャップがあります。

客からみれば、明美はふてくされて攻撃しているように映ります。

けれども明美の心象では、相手の攻撃から自分の身を守ろうと、萎縮しながら防御しているつもりなのです。

つまり、それは単純に言えば「恐怖反応」なのですが、客からみれば、その姿は「店員のくせに謝ろうとするところか、ふて腐れてケンカをふっかけてくる生意気な女の子」というふうにし映りません。

「私と相手との関係」で言うと、明美は「責められている。怖い」と感じて表情を強ばらせているのですが、客から見れば逆に、客のほうが明美から「責められている、攻撃されている」と映るのです。

といっても明美自身には、それが「親子関係で築かれた恐怖反応」という自覚はなかったかもしれません。

しかし次の瞬間、それがはっきりと表面化しました。

「みんなは携帯をもっているから、電話に出るのはほとんど私なんですよ。それに、以前にも同じようなことがあったから、言ってるんですよ。店員さんの昼の担当と夜の担当の相互伝達がうまくいってないんじゃないんですか」

客がそう指摘したとき、明美ははっきりと自分の恐怖が自覚され、次に言う言葉を失いました。後はもうただ萎縮して「すみません」と頭を垂れるしかありませんでした。その客は、

「店員さんのみんなが『誰かが連絡しているだろう』と無責任に考えて、人任せにしてしまってるんじゃないですか」

少し強気な態度に出ました。

「店員さん同士の相互伝達がうまくいかないってことは、ありますよ。でも、別のお店は、何人かの店員さんが、日にちを置いて、何度も『注文を受けている』と電話をしてくれました。あなたのお店は、注文したきりで、一度も電話がありませんでした。伝達がうまくいっていないのは同じでも、対応の姿勢がまったく違うということです」

客はそう言って店を出ていきました。そのとき明美は、その客は二度と店に足を運ばないだろうと思いました。

確かにその客が言うように、自分のこの店は全体的に諦めムードが蔓延しています。店長代理の上司は借りてきた猫のように自分だけ黙々と仕事をするだけで、従業員には文句のひとつも言えません。そんな上司だから、みんな勝手にやっているとこの感じなのでした。

けれども明美は、出て行った客に多少責任を感じるものの、反面、「どうせアルバイトだから、私には関係ないわ」と、そう呟いている自分もいました。所詮明美にとって、その店は「行けばアルバイト代がもらえるから」といった程度のものでしかありません。その責任感の希薄さが、客の単なる「問い合わせ」を「きつい苦情」と受け止めて、逆に客と自分の関係を、明美が自ら「きつい」関係にしていったのでした。

### ★ちょっと考えてみましょう

明美のような「詰問者—諦観者」の親子関係を築いていると、諦観者の子供は、相手が質問したり違った意見を述べたりするとき、その度に「相手から責められている」と感じてしまいます。相手は「私を責めて、従わせようとしている」と、その言葉を自分を非難する禁止や命令だと無意識に解釈して聞いてしまうのです。

そして、親子関係でその禁止や命令に対して「断ることを許されなかったり、自分の意思を尊重されなかった」諦観者は、社会においても「それを回避することはできない」という思い込みゆえに、言葉で平和的にコミュニケーションをとることができず、「反抗的な態度でノー」という姿勢を示すのです。

けれども心の中では「従わされる」という恐れがあって、どんなに反抗的な態度でふて腐れているとしても、心の中には「犠牲者意識」を抱いています。

このように明美が「きつく言われると辞めたくなくなってしまう」というのは、相手は責めていなくても「責められている」と考えて受け止めてしまうからでした。

それに、「責められている」と過剰に反応すると、さきほどの例のように、明美の客観的な態度というのは、逆に「ふて腐れた態度で相手を攻撃している」というふうに見えてしまうために、相手も反感を抱き、「相手が責める状況」を自ら創り出していってしまうのです。

つまり明美にとっては、「責められる」という恐れていた通りの状況が展開することになります。

仮に相手が本当に「きつい」相手であったとしましょう。

それでも、明美のように「責められている」という意識が強ければ、相手のその「きつい」言葉が非常に堪えるでしょうが、「責められている」という聞き方をしない人は、相手のその同じ「きつい」言葉も、諦観者ほどに「きつい」とは受け止めません。

相手との関係性でいうと、明美が「責められている」という意識が過剰であるために、人の言動を「私を責めている」というように結びつけ、そのために「反抗的な態度(ほんとうは怖いための防御反応)」をとってしまうのです。もちろんそのときに返す言葉は、相手を責めてしまうような「第二の感情」の言葉を使います。

明美は母親に責められて育ちました。そんな母親から学んでいる明美の言葉の使い方は、当然「相手を責める言葉」であるでしょう。だから明美はふて腐れるという防御反応を示しながら、態度や言葉そのものは「相手を責めていく」のです。

そのために、相手も攻撃的な感情を誘発されて、不快な感情で応戦する。そんな「関係性を築いてしまう」ので、人間関係が殺伐とした感じになってしまうということなのです。

特に諦観者は「責められている」という意識で萎縮していながらも、心の中では反発を覚え、絶えず「相手を責める言葉を頭の中で繰り返し」ています。

だからその頭の中で呟いている言葉を口に出すときも、「相手を責める」言葉となってしまいます。

このような諦観者が相手の言動に過剰に反応しては「責められている」と感じてきつくなってしまうのはなぜでしょうか。

それは、詰問者の親に責められて育った諦観者は、相手の言動をすぐに自分に関連づけて「自分を責めてしまう」からです。

自分とはまったく関係のない問題であっても、自分の問題のように思い込んでしまい、無意識に「自分を責めてしまう」癖がついています。だからよけい「無駄に苦しむ」ことになるのです。

諦観者のこの「自分の選択」と「相手の選択」との区別がつきにくいという点については、「選択の責任」の項目で詳しく述べていきたいと思います。

もう一つの大きなテーマとしては、明美が「きつい」と感じてしまうとき、その瞬間瞬間の場面で、明美は相手やその状況に不満を抱いているはずで

それは前著の二冊で述べているように、「自分中心」から「他者中心」へと流れていく意識の中間に、象徴的にいえば『我慢』があります。

この我慢というのは「私は一方的に責められて、自分の意思や気持ちを十分に聞いてもらえない」と自己表現や自己主張を諦めてしまっている、といったものですが、この「自己表現、自己主張」についても、後の章で詳しく取り上げたいと考えています。

## ●愛しながら自分が傷つく事を恐れる恐れる静子

その日の夜、「詰問者」の静子はまだ、電車の中で明美がふと呟いた「つまらない、何で生きてんだろう」という言葉が頭に引っかかかっていた。たいした変化も感じられない普段の生活を、ただ機械的にこなして一日を終えることで「つまらない」という気持ちに蓋をかぶせていたものの、明美の何げない言葉に珍しく心がざわついて不安になりました。その不安が次第に広がっていくと、やがて、ズンと肩に響くくらいに落ち込んで、静子は今まさに「つまらない気分」を味わっていました。

仕事で自分をごまかしているけれど、私は毎日、つまらない現実から眼を逸らせている……。

もっとも仕事は、収入を得るために仕方がないと割り切っている面もあります。

一生続けたいと思っている仕事ではないし、会社のほうもそれを前提に考えている。誰でもできる内容の仕事だから、別に自分でなくても会社は困らない。その程度の扱いだから、懸命に頑張っても「働き損」になるばかりだ。

詰問者の静子は、自分が「当てにならない」と信じてしまうと、いきなり店のシャッターを降ろしてしまうような態度で無視を決め込み、徹底的に切り離して捨ててしまうところがあります。だから職場に対しては「考えだしたらキリがないほど不満はいっぱいあるけど、どこもこんなもんだらう。どうせ仕事では見込みがないから」と考えてしまうのです。

そして、「後はもう……」と呟いたとき、ふと、部屋の鏡台の上にある携帯電話に視線が引き寄せられました。

最近恋人からの連絡が少なくなってきています。それが「つまらない」と感じてしまう原因なのでしょうか。

「私が明美の言葉に触発されたのも、恋人のことが頭にあっただけからなのかも知れない」

いつだったか、静子は明美に打ち明け話をしたことがありました。

「彼をほんとうに好きかどうか、分かんなくなっちゃっただよ」

年齢もそろそろ適齢期を過ぎるあたりに差しかかっています。結婚適齢期の年齢が男女共に高くなってきていて、結婚にそれほどこだわらなくなっている風潮だから、「たいした問題じゃないわ。気楽でいいじゃないの」と自分に言い聞かせながらも、結婚のことを考えるとやっぱり心穏やかではられません。

けれども、恋人は自分のことをどう思っているのか、結婚する気があるのかないのか。

彼の態度が煮え切らないとしたら、自分のほうがもっと積極的に結婚の話を追ったほう

がいいのだろうか。気持ちの中では、曖昧な態度しかとらない恋人に、「だいたいさあ、あなたは私と結婚する気があるの無いの。はっきりしてちょうだいよ」と怒鳴ってやりたい気分なのですが、このところ逢えば喧嘩ばかりしています。最初から彼は静子の言うことには耳に栓をして聞き流し、喧嘩にすらならないこともあります。

いま自分が結婚のことで騒ぎだしたとしても、決していい結果にはならないと思うから、我慢している状態でした。

静子は明美に、前の職場で知り合った恋人と付き合いはじめたきっかけから話しはじめました。

「最初は彼って、無愛想だから、なんて怖い人なんだと思ったのね。でも、どこか気になっていたのよ。旅行場所のことでアレコレ調べたら、そこについての旅行雑誌の情報をもってきてくれたのね。それがあんまりさりげなかったんで、アレッ、意外とやさしいじゃんと思ったの」

それで言葉を交わすようになったのですが、実際に付き合いはじめると、「気を使わないでいいからすごく気が楽」と静子は思いました。

「最初の頃は、彼ってとても優しくって、いつも私の思う通りにしてくれたのね。でも、近ごろ、全然、話を聞いてくれないの。私を好きなのって聞くと、好きだよって言ってくれるんだけど、ちょっとそんなふうには思えないのよね。一緒にお茶飲んでてもそっぽ向いているし、お部屋で一緒にいても、彼はなにを聞いてもボーッとテレビ見てて生返事だし、以前は彼のほうから私を誘い出して楽しいところに連れて行ってくれたりしてたのに、今は私から出掛けようって誘っても、渋々って感じしかしないのよね」

「でも、好きだって言ってくれてるんでしょ」

「そりゃあそうだけどお、あんな態度されたら、私迷ってしまうのね。本当は私のほうも好きじゃないんじゃないか、別れたほうがいいんじゃないかって」

別に明美に答えを求めているわけではありませんでした。けれども、自分の胸のうちにしまい込んでいると不安になってくるのです。

「いちど、ささいなことでもまた喧嘩になって、あのときは私のほうから、もう別れたほうがいいんじゃないのって言ったの。私といっても全然退屈そうだしさあ。どうしてそんな態度なわけ。誰か好きな人ができたの。できたんだったら正直に言えばいいじゃない。私は構わないわよって彼に言ってやったのよ」

「そうしたら何だって」

「いないって」

「だったら、いないんじゃない」

「ええ、私もいないと思うわよ。そんな感じじゃないもの」

静子は明美の話に関心があるわけではありませんでした。いつもこのように、静子は明美に一方的に話しては同意を求めてきます。けれども明美にしてみれば、同意を求められ



でも答えようがないし、仮に明美が自分の気持ちを言ったところで、自分を譲ろうとしない静子が素直に聞いてくれるとも思えありませんでした。だから明美は、

「倦怠期ってところじゃないの」

などと当たり障りのない返答をしてしまうのでした。

「うーん、そんなものかしらねえ。どっちかという、彼のほうが私を誘ってきて、私はあまり考えずに彼にのっていつちゃったって感じなので、すごく彼が好きで好きでたまらないってわけじゃなかったのね」

と静子はやっぱり「自分が彼を好きかどうか」というところにもどってしまうのでした。

しかしそれは、彼女の無意識の予防線でした。

以前の彼の愛し方であったなら「彼は絶対に私を愛している」と自信がもてました。けれども彼に不満を抱きはじめた静子は、いまのような彼の愛し方だと「自分が本当に愛されているかどうか」自信がなくなってしまうのです。

愛されているという自信がなくなってきたとき、「嫌われていたらどうしよう」と、そのことが「不安で仕方がない自分」に気づきました。

嫌われて傷つくのが怖い。

だったら嫌われて傷つくより、「自分のほうが彼を本当は好きじゃなかったんだ」と思ったほうがまだ傷つかない。そう考えました。彼女にとって重要なのは、「彼が私を愛しているか、私が彼を愛しているか」ではなく、「自分が傷つくかどうか」が問題なのでした。

「いやだったら、いやでいいわよ。だったら付き合いなればいいんじゃないの」

彼にそう厭味っぽく答えたのも、そんな自分の気持ちをごまかしたいからでした。

静子は恋人が自分に冷たくなった不満から、恋人との関係が「つまらない」と感じはじめていました。が、そのつまらなさが、仕事に対しても恋人に対しても同じところに原因のひとつがあると静子は気づいてはいませんでした。

しかし明美は静子の話をこのとき、心の中で、恋人と仲が悪くなるのは当たり前だと思って聞いていました。

「静子とその恋人」の関係は、「静子と私(明美)」の関係にも当てはまります。

一応年齢が上だから明美を立てているけれども、ときどき静子が自分の母親と重なって、イライラすることも少なくありません。親しくなったら尚更、静子から逃れられないような気分になってしまうのでした。

## ●何が明美の態度を変えたのか

ある日、職場で明美は自分が担当している売り場の一部の飾り付けをしていました。アルバイトではあっても、本社から新しく赴任してきた主任にインテリア系のセンスがいいと褒められたことで嬉しくなりました。

明美にとって人から褒められるという気分の高揚は、これまであまり感じたことのない感覚でした。振り返ると、親から、

「やっちゃ駄目。ちゃんとしなさい。どうして言う通りにしておかなかったの」

などと叱責された過去はすぐに次々と思い出されるのですが、「褒められたて嬉しかった」という経験は、いま思い出そうとしてもなかなか思い出すことができません。

だから、主任に「自分のセンスを認められた」ということを素直に受け止めることができませんでした。

心の奥ではちゃんとその嬉しさに反応して高揚しているのですが、これまで親に対してしてきたように、相手の胸の内をうかがったり、ひが目で受け取ってしまう癖で、「どうせお世辞に決まってるわ」と素直にそれを認めることができないのです。

だから主任の眼には、明美の表情のなさは相変わらずで、それほど喜んでいるふうには見えなかったでしょう。

けれども表情こそそうであっても、それこそ滅多にないほど高揚した気分を味わっていた明美はそのとき、明美なりに、少し積極的になってみる気になりました。

主任に「アルバイトのくせに生意気だ」と言われるのじゃないかとためらう気持ちもありましたが、気がつくとおそろおそろではあるものの、主任に、売り場の模様替えの一部の飾り付けを「手伝わせてほしい」と申し出ていました。

明美にとって、そんなことができる自分が驚きでした。

すると主任は案に相違して、

「やあ、そうかい、助かるよ。僕は細かいところが苦手だからねえ」

と快く明美の申し出を受けてくれたのでした。

気持ちよく受け入れてもらえたということも、明美にとっては初体験に等しいものでした。

### ★ちょっと考えてみましょう

この「明美と主任」の関係は、関係性でいうなら当然のことでした。別著でも度々繰り返し言っていることですが、人間関係というのは「お互いの関係性」で成り立っています。

自分が相手のことを意識していようとしまいと、お互いの反応を交流しながらやりとりを行っています。このため「他者中心的な生き方」をしている人ほど、相手に影響されやすいのです。

ふだんの明美は、諦観者の典型ともいえるように、社会や自分を諦めた気持ちをながめて心を閉ざし、心の中で相手を責めていて、まさにそういう表情や態度をとっています。彼女が所属している職場全体も諦めムードが漂っているために、それぞれがそれに影響を受け、あるいは与え合って、諦めムードの霏囲気をいっそうエスカレートさせるような状況になっていました。

そんな中で、新任の主任はそうではありませんでした。

明美に対する主任の態度が明美に好ましい影響を与えたのでした。具体的にいうとそれは、

- 1 主任は明美の肯定的な面をみつけて、それを公平に評価し、それを言葉で伝えた。
- 2 主任は明美の積極性を肯定的に受け止めて、「助かるよ」とったふうに、ちゃんと言葉で自分の気持ちを明美に伝えた。

このちょっとした「彼女を受け入れる」主任の態度が明美のやる気を刺激したのでした。

他者中心の明美は、良くも悪くも影響を受けやすいのです。

### ●いつの間にかすり替わる人間関係の不思議

ここまでの明美は、自分でも信じられないほど気持ちよく作業をはじめられそうになっていました。ささやかな作業なのですが、明美にとって「全面的に仕事を任されている」言い換えれば「自分が主任に認められた」ということが、なんだか面はゆくもあり誇らしくもありました。

明美はあれこれと自分で考え、「やりたいように自由にやれる」空間を楽しんで作業をしました。「物を創造する楽しさ」とはこういうことなのだ、と明美は思いました。

その楽しみの中に、静子が割り込んできました。

「ああ、それ大変でしょう、私も手伝ってあげるう」

明美は独りでやりたかったのですが、静子を断ることができませんでした。静子自身も自分の押し付けがましさを明美が迷惑がっているなどとは夢にも思いません。

静子は「やってあげている」という意識から、いつの間にか自分が主導権を握っていました。

「そうそう、あのさあ、ペンチとってきて」

「押しピンが足りないわね、探してきて」

「ほら、ここ、止めるから、押さえといてくれなくちゃ困るわよ」

と静子のいつもの指示、命令がはじまっていた。

「あなたがやったここの色合い、ちょっと違うんじゃないかしら」

としっかり相手を否定することも忘れません。むろん静子にとって否定や批判、非難は日常語になっているために、自分が明美に対して「傷つける発言をしている」とは思ってもいません。しかし自覚はなくても静子は、その色合いを変更しなければ気に入らなかつたし、実際に、あれこれと意見(のつもり。実は強制)を言ってその色合いを変更するまで粘ったのでした。

明美はそんな静子のお節介に自分の母親との確執が思い出され、からだのほうで条件反射のように反応してしまいます。静子に自分の仕事を奪われてしまった明美は、気持ちの

上ではその作業をすっかり放棄してしまいました。すると静子はいらだった表情で明美を叱責しました。

「なに、ポーッとしてるのよ。どうして手伝わないのよ。これって誰の仕事なの。私は、あなたのためにやってんでしょ」

明美は腹が立ちましたが、いつもの癖でその怒りをぐっと飲み込みました。

ふだんの二人は、結構辛辣に言い合っているようにみえますが、それは表面上のことで、「静子が自分を受け入れてくれている」と明美が信じられているときに限るものでした。お互いに顔色を窺うという「他者中心」の意識に長けている静子と明美は、その点では常に、相手の顔色を窺って反応し合っています。

特に明美は「自分がやることを静子が許してくれている」と信じられているときは平気で言いたいことを言います。しかしその関係は飽くまでも「静子が明美にOKを出している」ときだけという前提条件がついていたのでした。

心理的なすれ違いが生じて静子が不機嫌になってしまうととたんに、明美は「自分が嫌われてしまうのではないか。見捨てられるかもしれない」という恐れから、相手にへんに気を使ったり、オドオドしたりしはじめるのです。

しかし静子にしてみれば、明美がこういう態度をとるから尚更、明美に対して押し付けがましい態度や恩着せがましい態度をとりたくなっていくのです。

そんな静子に対して、明美は、彼女との付き合いをますます息苦しく感じながらも、見捨てられる恐れから、自分を殺して諦観者の役を演じることになっていくのですが、これはすでに自分の親子関係でやっていることなのでした。

静子は恋人との間でも、明美に対するのと同じような態度をとっていました。知り合った当初、静子は恋人が自分の思った通りのことをやってくれる優しい男性だと映っていました。それは恋人も明美同様に人の顔色を窺うのに長けているため、先回りして静子の望みを察知することができたからでした。静子はそれを優しさだと思いました。が、静子は、恋人に対して、自分が無言の要求を自分がしているのだと気づいていませんでした。

やがて恋人は、静子の望み通りに先回して用意するのに疲れはじめていきました。

諦観者のパターンとしては、「従わなければならない」と考えて「なんとか相手の要求に答えようとする」か、「もう従えない」とばかりにすっかり放棄して諦めてしまうかの両極端に傾きやすいのです。それが静子の眼には「自分に冷たくなった」と映る、というのが真相だったのです。

けれども、「私と相手との関係性」で言うと、相手が冷たくなっただけでなく、自分が、相手を退けていると気付かない静子は、恋人に要求しないではいられない気持ちになって、「この前電話したときもいなかったわよね。どこに行ったの」

「電話してって言ったのに、どうして電話くれなかったの」

「へーえ、そんなに急に仕事が忙しくなったの」

「忙しいって言ったのに、いま、家にいるじゃない。ウソついたんだ」

「来週は必ずって言うけど、どうせまた、約束破るんでしょ」

などと、言葉のはしばしに皮肉や厭味をこめながら相手を責めて、自ら恋人との距離を隔てていくのでした。

静子も明美も恋人もそうなのですが、彼らの関係性で際立っているのは、「拒絶と依存」の極端さでしょう。例えば静子とその恋人の関係は、次のような形で進んでいったのでした。

静子は最初は過剰なほど恋人を警戒していました。

彼にはその表情が、何を独りで肩を怒らせているんだと思うほど「険しく」映っています。しかし彼が彼女に旅行雑誌を渡したとたん、静子の態度が一変しました。

静子は彼を信用できると思ったのです。しかしそれは、「拒絶」から「依存」へと「支配関係」が形を変えただけでした。

具体的にはこんなふうに静子の態度は変化していきました。

まず静子のほうが、一方的と思えるほど積極的になっていきました。

その積極さだけをみると、彼に対する配慮などあまり考えていないふうでした。というより、静子にとっては恋愛をしているつもりでも、それは恋愛の形を保っているだけで、そこには「彼など眼中にない」といった感じの奇妙な熱心さでした。

静子は知り合っただれども経たないうちに、

「これは私の部屋の鍵だから、あなた、持っててね」

と、静子は自分の鍵を手渡し、空になった手を差し出しました。恋人が「？」という顔をしていると、

「あなたの部屋の鍵を頂戴。すぐにスペアキーを作るから」

彼女は彼の部屋を数回訪れると、もう自分の馴染んだ部屋のような感覚で、早速自分のタオルや歯ブラシ、化粧品一式を持ち込み、パジャマを一緒に買いに行くように促す状態でした。

諦観者の彼にとっては、断る猶予も与えられないような速さを感じて、まるで、見る間に自分の目の前を通り過ぎていく新幹線のような早業でした。

もちろん諦観者の彼であったから、仮に断る猶予を与えられたとしても彼女の思い込みにも近い迫り方に圧倒されてそれはできなかったでしょう。

いいえ、「自分を中心に」できない彼は、自分に断る意志があるかどうかさえも気付いていなかったのかも知れません。ただ静子の性急さに固唾を飲み、まるで他人事（ひとごと）のような無感覚さで見送るしかなかったのです。

これはもちろん詰問者だけでなく、諦観者であろうが、暴君者、犠牲者であろうが、支配性の強い関係ではいつでも起こり得ることです。

社会を信頼できないと思ったら、拒絶したり警戒したりするでしょう。自分自身をそん

な社会に対して無力だと信じていたら尚更です。しかしそんな緊張感にとらわれていると、逆に客観的な判断の眼が曇ります。しかもそんな緊迫感から、ふとしたはずみに気を許してしまいやすいのです。

相手や社会を拒絶すればするほど、「(その望みを) 抑えれば抑えるほど、それにこだわっていく」の原理通りに、心の底ではそれを「渴望する」気持ちが大きくなってきます。そしていったん気を許すと、尋常ではない速さでのめり込んでいく。

本人はそれを「信頼」だと信じているかもしれないが、本当はそれは「依存」です。

この「拒絶」と「依存」の両極端が、人間関係でも「我慢」かそれとも「爆発させる」といった極端なコミュニケーションのとり方にもあらわれているといえるです。